

# 靈寶の「天文」信仰と古靈寶經の教義の展開

## — 敦煌本『太上洞玄靈寶真文度人本行妙經』を中心として

王承文

(中山大學、廣州)

東晉から南北朝にかけて相次いで世に出た各種の道教の經典のなかで、古靈寶經は、各派の經典の教義の整合性をとくに重視し、中古の道教が統一性を備えた經典教義の體系を構築するにあたって、もっとも深い影響を及ぼした。敦煌本『太上洞玄靈寶真文度人本行妙經』は、明代の『正統道藏』には収録されていない古靈寶經の殘卷である。この靈寶經典は、中古道教の重要な神である太上大道君・五老上帝等の徳行功業の因縁話と靈寶の「天文」信仰を結合して、漢・晉以來、わが國の宗教の神學の傳統に全く新しい解釋を展開した。

本稿では、そのうち太上大道君自體は、早期の上清派の經典である『上清高聖太上大道君洞真金元八景玉籙』に由來することを論證する。しかし、古靈寶經は、すでにこの上清派のもっとも重要な神格から新たに原始天尊の下で靈寶の教法を専ら推し進める神像を創り上げていたのであり、その身の上話、經歷は、最初から最後まで靈寶の「天文」と繋がりあっていた。太上老君は早期の天師道の最高神とされていたが、同様に改造されて靈寶の教法を講説する神となった。元始天尊・太上大道君・太上老君は中古の道教の神々の體系の中でもっとも代表的な神とされるが、靈寶の天文の信仰と教義が順序をつけて一緒に並べたものなのである。この思想は、唐代における道教の統一された經典教義體系の重要な組織構成部分たる「三清神」の出現にも直接的な影響を与えた。しかるに南朝の上清派は元始天尊の唯一最高の地位を承認はしたけれども、依然として太上大道君を上清經の神靈とする傳統を擁護する努力を續けた。南北朝から唐宋までの道教典籍の中にあっては、二人の太上大道君が同時に並び立つ奇妙奇天烈な現象が出現する。このため、本稿では、一つの重要な方面から、靈寶の「天文」信仰が古靈寶經の教義の體系の中の核心的な位置を占め、同時に中古の道教史研究の鍵となる神が「體系化」と「秩序化」に向って進んでいく過程をも反映していることを證明する。

王承文 WANG Chengwen おう・しょうぶん

1962年生

中山大學歴史系教授 歴史學博士(中山大學)

主要著作 《敦煌古靈寶經與晉唐道教》 〈敦煌本  
《太極左仙公請問經》考論〉 《隋書・經籍志・道  
經序》與道教教主元始天尊的確立〉 ほか多数